



大阪+知的障害+地域+おもい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 2643 号 2015.9.22 発行

論説：公認心理師法 “ストレス社会” に新資格 佐賀新聞 2015年09月22日

今国会で「公認心理師法」が成立した。心に問題を抱える人に専門知識を生かして相談や助言、援助にあたる新しい国家資格。“ストレス社会”で、いかに心の健康を保つかというニーズと関心は高く、カウンセリングの専門職として地位確立につながりそうだ。

これまで心理専門職に必要な資格は、「臨床心理士」「認定カウンセラー」「臨床発達心理士」「学校心理士」など20以上もあるとされる。いずれも学会や公益法人が認定する民間資格である。今回、初の国家資格制度が設けられて実質的に一本化が図られる。

最大の焦点となった安全保障関連法の陰に隠れた形になったが、国家資格化は関係者にとって長年の悲願だったという。資格を定めることによって業務内容は整理され、国民の心の健康増進に寄与することが目的にうたわれた。

公認心理師になるには、文部科学省と厚生労働省が実施する試験に合格することが条件になる。それ以外の方が「〇〇心理師」と名乗ることは禁止される。業務は保健医療、福祉、教育など幅広い分野となり、心理的支援を要する人に助言、指導などの援助をすることと規定された。

受験には大学院で必要な課程を修了するか、大学卒業後に特定の施設で働いた実績や専門的知識・技能が必要になる。うつ病や自殺の増加を背景に心理療法の需要が高まっており、心理専門職として業務の評価や専門能力の向上、志望者増にもつながりそうだ。

ただ、既に臨床心理士をはじめとする心理専門職についている人たちの扱い方は未定で、法律には、これまで培ってきた社会的な信用と実績を尊重するように求める付帯決議があった。また、医師との関係や連携を明確にすることも課題として残っている。

日本臨床心理士会は国家資格化を推進してきた団体の一つで、会員は現在1万9600人を超えている。臨床心理士は精神科の医師とは区別されるが、精神神経科や心療内科で相談にのったり、学校や福祉施設、矯正施設、子育て支援など多様な場で活躍している。

援助の手法は心理テストや面接、夢分析など多岐にわたる。小中高などに配置されるスクールカウンセラーは、いじめや不登校などの悩みを抱えた子どもたちの相談を受けるほか、教職員や保護者にもアドバイスする。心理の専門的知識が効果を上げているという。

企業でも心の健康を保つメンタルヘルスが重要度を増しており、国家資格化によって職域の拡大が見込まれる。現在、臨床心理士に必要な講座を持つ大学・大学院は全国170程度ある。公認心理師に必要なカリキュラムは今後決まるが、教育課程の充実にもつながりそうだ。

法案は2005年にも検討されたものの、医師との競合の懸念などで提出に至らなかった。今回の法律では依頼者に主治医がいる場合には、医師の指示を受けることが義務とされた。ただ、公認心理師の専門性や自律性も尊重したチーム医療が理想的な姿だろう。

ストレス社会には心理学を基盤にした専門職が多様な場で求められる。国家資格化によって業務への正当な評価がなされ、ひいては心の健康を保つ上での社会的支援が充実することを期待したい。(宇都宮忠)

## 【島人の目】命の沙汰も金次第

琉球新報 2015年9月21日

駐在員の友人が腰の手術で入院。日本の保険が適用されるまで前払いした医療費は、優に家1軒が買える金額で支払いに往生した。米国では骨折の手術で1日入院すると150万円、盲腸の手術代167万円、麻酔代47万円、その他もろもろで全額575万円。保険に加入していても、病院や保険内容で違うが自己負担額は116万円になる。

国民皆保険制度がない米国は、自営業や自由業の人は、各自で保険会社と契約、給与者は勤務する会社や組織が一部を負担する民間医療保険に加入する。その保険額と医療費が年々高騰してきている。

その背景には医療界に国の介入がなく、医療を規制する法律がないことがある。高額な医療費、薬剤費、そして悪質な保険もあり、米国の自己破産原因の6割が医療費だという。医療保険に加入済みでも、民間保険会社は控除額に達しないといい、さらには保険適用外などと主張し出し洩る。中流レベルの誰でも深刻な病気になれば破産しかねない状況だ。

刑務所で無料の医療を受けるためにわざと犯罪を犯したという笑えない話もある。毎年、4万5千人が医療にかかれず亡くなっている現状はまさに「弱者を見捨てる」制度で、米国の医療界はもうけのみのビジネスに転じている。

その根拠に保険業界と製薬会社に莫大（ばくだい）な利益がもたらされている。オバマケアもふたを開ければ、結局は民間保険会社がもうけるシステムにすぎない。保険費が高すぎて民間の保険を買える余裕のないグレーゾーンの保険未加入者が300万人。彼らは日々、病気にかからないためのおまじない「Knock on wood」で机をたたき、いつまでも運が続くようにと願っている。

以前日本の市役所の窓口で「国保は人を救済するための社会保障。助け合いの精神」と言われた。何とありがたい制度か。だが、公平な医療の恩恵をなきものにし、医療を商品化しようとする米国のヘルスケア業界が、虎視眈々（たんたん）と日本を狙っている。事故に遭って病院で軽い検査を受けただけで「120万円」も取られることにならないよう、国民皆保険制度を守っていくべきだろう。（鈴木多美子、バージニア通信員）

## 4歳男児暴行死：病院は「虐待の疑い」児相に通告していた

毎日新聞 2015年9月21日

札幌市手稲区で17日、4歳男児が義父に殴られて死亡した事件で、男児が持病の治療のため入院していた同市内の病院が1日、同市児童相談所に「体にあざがあり、虐待が疑われる」と電話で通告していたことが21日、児相への取材で分かった。児相は両親らへの面会などから、「虐待は裏付けられない」と判断し、一時保護などは行わなかった。

この事件では、17日午前1時半ごろ、札幌市手稲区新発寒7の2の運送業、宮北明容疑者（24）＝傷害致死容疑で逮捕＝が自宅で義理の息子の海人ちゃん（4）を殴り、出血性ショックで死亡させたとされる。道警札幌手稲署は21日、宮北容疑者を札幌地検に送検した。

児相は病院からの通告を受け、3日に海人ちゃんと母、8日には宮北容疑者とそれぞれ面会した。両親はあざの原因を「転んだため」などと説明し、あざも古かったことから、児相は子育て支援をしながら様子を見ることにした。海人ちゃんは14日に退院し、3日後に死亡した。

児相の山本美皇子（みおこ）相談判定2課長は「命が失われたことを深刻に受け止め、対応については今後、検証していく」と話した。【小川祐希】

## 名曲奏で東北応援

読売新聞 2015年9月22日

◇大津 チャリティー演奏会

東日本大震災の被災者を支援しようと、近江神宮（大津市神宮町）の近江勸学館で21日、市民有志らがチャリティーコンサートを開き、往年の名曲を披露した。

精神障害者の支援施設を運営するNPO法人「若鮎の家」（同市坂本）が2012年から主催し、3回目。

**演奏を披露する出演者（大津市で）**

この日は3組が、ビートルズや美空ひばりさんらの名曲を熱唱すると、約100人の来場者は当時を懐かしむように目を閉じ、耳を傾けていた。

出演した同法人の施設長・井上均さん（62）は「今も苦しんでいる被災者がいる。『3・11』を忘れずに、これからも支援の輪を広げていきたい」と話していた。

集まった義援金は、10月頃に岩手県の陸前高田、大船渡両市の自治会に手渡す予定。（猪股和也）



### 水害避難後も苦境の弱者 子が自閉症「集団生活は無理」 酒本友紀子、赤井陽介、池田良

朝日新聞 2015年9月22日

避難する体育館の布団の上で、夕食後のひとときを過ごす斎藤哲雄さん（左）と妻の純子さん＝21日午後7時29分、茨城県常総市、関田航撮影



大規模な洪水に見舞われた茨城県常総市では、発生から11日経った21日も、1300人の市民が市内外の避難所で生活を続けている。水道は21日夜になって、市内全域で復旧したが元の生活に戻れる見通しは立たない。障害のある人や、自閉症の人がいる家族は不自由な毎日を強いられている。



石下（いしげ）総合体育館で避難生活を続ける斎藤哲雄さん（66）は文字が認識できない「視覚失認」という障害があり、妻の純子さん（61）は全盲だ。

洪水が発生した日、2人は自宅2階に取り残され、ヘリで救助された。視覚障害者が使う白杖（はくじょう）は、

つり上げられる際、置いていかざるを得なかった。2日後にボランティアの車で白杖や、時刻を音で知らせる腕時計を取りに行けたが、周囲に人が多い中で動きづらい状況が続く。

避難所でラジオをつけたままにもできず、被害状況や復旧の情報は、新聞を読んでもらったり、人に聴いたりして得た。「耳からの情報が少なく不安だった」と2人は言う。

自宅にヘルパーを派遣してくれていた市社会福祉協議会の職員と連絡が取れたのは、1週間ほど経ってから。一時的に入所できる福祉施設を探してもらっている。自宅は損壊が激しく「このまま老人ホームに入るか、新しい家を探すか」。先行きが見えず、2人は不安を募らせる。



## アメリカで学んだ「心のケア」 震災で被災した看護学生 8人

朝日新聞 2015年9月22日

震災で被災した県内の看護学生8人がこの夏、米国で災害看護の研修を受けた。帰国後に仙台市で開いた報告会では、米同時多発テロの遺族から聞いた話や、災害時に必要なケアについて語った。自らの被災体験とも重ね合わせ、次は人を助ける側に――。そんな思いを新たにできる機会となった。



災害の被災者を交えた詩の朗読会の場で、研究者や医師らと話を  
する岩渕阿椰茄さん（左から3人目）ら看護学生たち＝8月13  
日、ニューヨークのコ  
ロンビア大学、坂本真  
理氏撮影

報告会で研修の成果を

発表する看護学生＝今月12日、仙台市

研修は、米日にまたがる非営利団体が震災をきっかけに始めた若者の交流プログラムの一環。県内の看護師養成系大学や専門学校から19～24歳の女子学生が選ばれ、8月に約2週間、滞在した。

現地では、3年前にニューヨークを襲ったハリケーン「サンディ」の水害で、子どもを救護した看護師らに話を聞いたり、感染症や化学物質汚染などに対応する防護服を着る訓練などをしたりした。

今月12日にあった報告会では、参加者が一人ひとり順に前に立ち、印象に残った研修やそこから得たものなどを話した。

石巻市の石巻赤十字看護専門学校2年の岩渕阿椰茄（あやな）さん（19）は、米同時多発テロで息子や同僚を亡くした遺族、消防士とニューヨークで対面したことを語った。「当時の経験や恐怖の気持ちを話してもらい、語り継ぐことの大事さを感じた」

岩渕さんは震災で、祖母を目の前で亡くした。あの日は、中学の卒業式だった。お祝いの昼食を家族で囲んだ2時間後。海に近い家に祖母と2人でいて、津波から逃げ遅れた。ブロック塀に引っかかっていた軽トラックによじ登り、運転席の狭い屋根へ。海水は数センチ下まで迫った。

ずぶぬれで横たわった祖母は、震え続けていた。「おばあちゃん、がんばって」と励ましたが、夜には雪が舞い出した。祖母はいびきをかいて寝始めた。その様子に安心したが、実は低体温症だったとは分からなかった。夜が明けて間もなく、救援のボートが来たが、祖母の意識は二度と戻らなかった。

看護師の夢は祖母との約束だった。世界中の震災や水害の現場をテレビで見て、「苦しむ人を助けたい」と祖母に話し、応援されてきた。その祖母を失い、精神的に苦しんだ。

研修で、米同時多発テロの遺族らが思いを抱え込まずに声を上げることで喪失感を克服したと聞き、話を受け止め、悲しい出来事を共有する人がいることが大切だと気づいた。「災害時に、そんな心のケアができる看護師になりたい」

ほかの7人もそれぞれ、震災での被災体験を持つ。祖父が仮設暮らしという学生もいる。ある学生は、震災時の停電で障害がある兄の人工呼吸器が止まり、両親が駆けずり回って自家発電機を確保したという。

研修に同行した菅原準一・東北大教授（産婦人科）は「今回の経験を生かし、言葉や文化の壁も乗り越えて人を助けられる看護師になってほしい」と話している。（森治文）



## 連携不備に低い危機意識、生かせない「教訓」 川崎の老人ホーム転落死

産経新聞 2015年9月21日

川崎市幸区の介護付き有料老人ホーム「Sアミーユ川崎幸町」で3人の入所者が相次い

で転落死した問題で、搬送を担った市消防局と高齢者施設を監督する市の担当課間による不十分な情報共有や、市の危機意識の低さに批判が寄せられている。同市は今年に入って発生した多摩川河川敷で中学1年の男子生徒が殺害された事件や、11人の死者を出した簡易宿泊所（簡宿）火災の際にも縦割り行政の弊害や「後手後手対応」が批判されたが、今回も過去の教訓を生かせない“体質”を露呈させた形だ。

**高齢入所者3人が相次いで転落死した有料介護付き老人ホーム「Sアミーユ川崎幸町」＝川崎市幸区（那須慎一撮影）**

「2件続いた時点で、市としてももう少し深く見ておくべきだった」

福田紀彦市長は15日の定例会見で、市の対応不足を指摘した。

市内の老人福祉施設ではこの数年、転落死亡事故が起きていない。にもかかわらず、「警察が事故と判断した」（市高齢者事業推進課）として施設が作成した報告書をうのみし、最初の2件を口頭指導にとどめてしまった。

その後、同課の担当者は6月と7月の2回にわたって施設へ監査を実施したが、昨年12月末に発生した3件目の転落死は把握していなかった。ようやく認知したのは、報道各社からの問い合わせがあった8月下旬。ある市議は「転落死が2件重なった時点で『この施設は何かおかしい』と思うべきだった。市は感度が鈍い」と断罪する。

一方、3人を救急搬送した市消防局も、8月下旬に同課から3件の転落死について問い合わせがあるまで事案の詳細を市の担当課と共有していなかった。そもそも、「怪しいと思ったり、（転落死などの）事案が続いたときでも、制度上では情報を共有する仕組みはない」（市消防局）といい、連携強化にはほど遠いのが実情だ。

中1殺害では警察との、簡宿火災では市消防を含む関係部局間の連携不足を厳しく指摘された同市は、内部の対策会議を設置し、今後、「学校警察連携制度」の協定を結ぶなどの改善策を取ったが、「教訓」は今回も生かされなかった。

福田市長は、今回の事案を受けて部署を超えた情報共有などの仕組みづくりを模索していく考えを示しているが、別の市議は「似たような対策会議ばかりつくっても仕方がない。要は職員の意識の問題だ」と指摘している。



## 偏見や差別を乗り越えよう 来月にシンポ

読売新聞 2015年09月22日

障害者やマイノリティーなどへの偏見や差別を乗り越えるために何が必要かを考えるシンポジウム「品川 de 秋の大学トーク～対話で拓く未来への知」（京都大学学術出版会、活字文化推進会議など主催、読売新聞社後援）が10月17日、港区港南の京都大学東京オフィスで開かれる。

テーマは「対立を乗り越える心と実践」。栗田季佳・三重大学専任講師、星加良司・東大大学院専任講師、岡原正幸・慶大文学部教授による講演とパネル討論が行われる。

午後1時半開会。高校生以上が対象で、聴講券が必要。希望者ははがきかファクス（075・761・6190）で、〈1〉郵便番号、住所〈2〉氏名、年齢〈3〉職業〈4〉電話番号を明記し、〒606・8315 京都市左京区吉田近衛町69 京都大学学術出版会シンポ係へ申し込む。メール(sympo@kyoto-up.or.jp)も可。定員100人。

問い合わせは同出版会（075・761・6182、平日午前10時～午後5時）。

## 古着集めて再利用 洋服ポスト大好評 麻生区の施設「しらかし園」

東京新聞 2015年9月22日

タンズに眠っている服、ありませんか。川崎市麻生区の障害者通所施設「しらかし園」が、着なくなった衣類を住民から集めて再活用する「洋服ポスト」の活動を月2回行い、

好評を博している。取り組みは通所者の工賃や地域との交流にもつながる。開始から1年を迎える23日も実施する予定で、施設は「気軽に参加して」と呼び掛けている。（横井武昭）

今月中旬、しらかし園の敷地内にあるログハウス調の建物に、重そうな紙袋やポリ袋を抱えた住民らが次々と集まってきた。どの袋にも洋服やスーツ、ぬいぐるみなどがぎっしり。一歳の娘と訪れた同区の主婦（38）は「子どもはすぐ大きくなるけれど、服を捨てるのはもったいない。使ってもらえるとありがたい」。車でスーツやネクタイを持ってきた東京都内の男性（61）も「定年になって必要ないし、役に立てれば気持ちいい」と話す。袋を丁寧に受け取った通所者の男性は「いっぱい集まるとうれしい」と笑顔を見せた。

**「洋服ポスト」に集まった服やぬいぐるみの重さを測って整理する「しらかし園」の通所者たち＝麻生区で**

洋服ポストは二〇一一年に都内で始まった取り組みで、現在はさまざまな団体が実施しており、NPO法人「洋服ポストネットワーク協議会」が各地の活動を統括している。集まった衣類は都内の古着店に売却され、アジアなど海外の市場で販売される。しらかし園は同協議会の協力を受け、県内で初めて昨年九月から始めた。



しらかし園では、毎月第二、四水曜日の午前九時半から正午まで開催。そのままの状態ので使えるものを原則に、衣類のほか、バッグや靴、毛布なども受け付ける。施設の通所者と職員が数人ずつ当番制で対応し、受け取りや計量を行う。

衣類は古着業者が一キロあたり十五円で買い取り、収入は通所者の工賃に配分される。普段は金属部品の袋詰めなどの軽作業で平均時給が三十円の通所者にとって励みになる。口コミで評判が広がり、これまでに二十五回の開催で計約一万千七十キロが集まった。

通所者と地域住民との交流機会もうまれた。別府政行施設長（42）は「住民の方は何かきっかけがなければ施設に来ることは少なく、洋服ポストで『ありがとうございます』と言葉を交わす接点ができただことは大きい。一年たって地域に根付いてきた。これからも地域の連携や社会貢献ができる場になれば」と話す。

一周年にあたる二十三日は、通常の受付時間を拡大し、午前九時半から午後三時まで開く。問い合わせはしらかし園＝電044（988）5503＝へ。

## 障害者のアート 川口から世界へ ブランドとのコラボ商品も

東京新聞 2015年9月22日

斬新な作風で国内外から高く評価されている障害者のアートの拠点が、川口市木曾呂にある。県内で施設など二十一の福祉事業を運営する社会福祉法人みぬま福祉会のギャラリー兼アトリエ「工房集（しゅう）」。「できない仕事に自分を合わせるのではなく、好きなことを仕事にしよう」と障害を逆手に取った試みは、有名ブランドとの商品開発や海外での個展開催など、活躍の場を広げている。（谷岡聖史）

「工房集」は、知的などの障害者約百五十人が創作に取り組むプロジェクトの名称。一九九一年に入所した横山明子さん（42）は清掃用の古布をつくる作業が苦手な一方、落書きが大好きだった。「これを仕事にできないか」と取り組みが始まった。「彼らの活動は新しい価値をつくり出している」と話す宮本さん（左）＝川口市で

国内で展覧会を重ね、二〇〇二年には発信の拠点にしようとギャラリー兼アトリエを開設。グッズ販売や企業からの注文などで現在は年に五百万円程



度の収益を生み出し、文字通りの「仕事」に成長した。法人職員でプロジェクト責任者の宮本恵美さん（48）は「どんなに障害が重くても、社会に出れば働くのは権利。彼らの活動は新しい価値をつくり出している」と語る。

ひらがなを無数に重ねた書と絵画の間のような斎藤裕一さん（32）の作品を機に、フランスや米国の美術関係者からも注目されるように。ボールペンなどの描線を画面中に走らせた連作「せっけんのせ」の柴田鋭一さん（45）は一三年にニューヨークで個展を開き、全九点が計四百万円以上で完売。佐々木華枝さん（32）、大倉史子さん（30）、尾崎翔悟さん（26）の作品は人気ブランド「BEAMS」のシャツなどのデザインに採用された。

障害者のアート作品は近年、「アウトサイダー・アート」や「アール・ブリュット」とも呼ばれ、常識にとらわれない自由な発想で美術関係者に評価されている。工房集からは多くの作家がその最前線で活躍しているが、「特別な人のための施設でも、絵描きを育てるのが目的でもない」と宮本さん。「自分を表現することは誰にとっても大事。作品がほめられ、展示されることで、本人も親も職員も変わる。社会とつながることに意味がある」と、創作活動自体が持つ力を強調する。

【埼玉】杉浦さんが出品 県立近代美術館の全国展 東京新聞 2015年9月22日



杉浦篤さんの作品

文化庁の調査を基に全国の美術館員らが障害者アーティスト十二人を推薦した県立近代美術館（さいたま市浦和区）の企画展「すごいぞ、これは！」には、工房集から杉浦篤さん（45）＝同市見沼区＝が参加している。十一月三日まで。

杉浦さんは、いつも持ち歩いている風景などの写真約四十点を出品。大事に毎日触っているうちに表面や角がこすれ、特殊加工したように歴史を感じさせる独特の風合いが生まれた。

入館時間は午前十時～午後五時。月曜休館（祝日は開館）。一般五百円、大学生・高校生四百円。問い合わせは同館＝電048（824）0111＝へ。

廃材でアート、障害者らの作品展 駒ヶ根高原美術館 信濃毎日新聞 2015年9月22日



展示作品を見る家族連れ

県内の障害者や駒ヶ根市東中学校生徒の作品展「廃材アート×アール・ブリュット展」が、駒ヶ根高原美術館（駒ヶ根市）で開かれている。アール・ブリュットはフランス語で「生（き、なま）の芸術」の意味。美術の専門的な教育を受けていない人が内発的に創作した作品を指すという。何色もの針金を曲げた「ぐにゃぐにゃ」、リモコンや電卓を積み上げた「アナログタワー」など発想豊かな約40点が並ぶ。

県社会福祉事業団（長野市）などでつくり、障害者らが趣味や生きがいを見つける支援などをする「高原セミナー実行委員会」が企画。同実行委事務局の中村勘二さん（41）＝長野市＝によると、東中の生徒は「廃材でメッセージを伝えよう」を主題に制作しており、素材の使い方など障害者の作品と共通する点がある。

同館学芸員の鈴木ゆり香さん（24）は「廃材を使った作品は

お客さんの反応を想像できなかつたけれど、良かったと声を掛けてくださる人が多くいる」と話していた。

10月31日まで。水曜休館（23日は開館、24日休館）。一般800円、大学・高校生500円、小中学生300円。

### 福祉用具の事故多発 5年間に49人死亡

NHK ニュース 2015年9月21日

高齢者や体の不自由な人が使う介護ベッドや電動車いすなどの福祉用具の事故で昨年度



までの5年間に49人が亡くなっているとして、NITE＝製品評価技術基盤機構が注意を呼びかけています。

NITEによりますと、昨年度までの5年間に報告された福祉用具による事故は147件でこのうち死亡事故で合わせて49人が亡くなったということです。

死亡事故の内訳は、介護ベッドと電動車いすがそれぞれ22件と最も多く、次いで、床

置き式の手すり4件、介護用リフトで1件となっています。

NITEが事故の状況を調べたところ、介護ベッドの事故では手すりなどの隙間に首を挟み込むケースが多く、また、電動車いすの事故では、運転操作を誤って川や側溝などに転落する事故が多いということです。このためNITEでは、介護ベッドを使う際には手すりとの間に隙間がないか確認しカバーやクッションで隙間を塞ぐことや、電動車いすは十分な練習を行い、走行中は路肩に寄りすぎないことなどを呼びかけています。

NITEの池谷玲夫課長は「事故の多くは製品を使い始めて1年未満の使い方に慣れていない時期に起きている。こうした時期には特に誤った使い方をしていないか周囲にいる人が注意を払ってほしい」と話しています。

### みこしの上、祭り気分 NPO法人が施設訪問 愛媛新聞 2015年09月22日



みこしに乗り、施設職員らの声援に笑顔で手を振る105歳の中村さん

施設で暮らす高齢者に秋祭りの雰囲気を楽しんでもらおうとNPO法人「ボランティア神輿（みこし）の会」（平野昌弘理事長、愛媛県松山市）が敬老の日の21日、松前町鶴吉の特別養護老人ホーム鶴寿荘を訪れ、利用者を乗せて秋晴れの空に向けてみこしを差上げた。いきいきとした表情の高齢者の周りで、職員や家族にも笑顔が広がった。

市内の有志でつくる同会は、約22年前から県内の高齢者や障害者の福祉施設などを年間15カ所ほど巡っている。会によると、鶴寿荘の訪問は約13年前から続けている。

21日は鶴寿荘の玄関前広場に、施設利用者や家族ら約130人が集まった。88～105歳の男女計15人は紫色の法被を羽織り、職員に支えられて車いすから降りて順番にみこしの上へ。かき手が「よいさ、よいさ」の掛け声で盛り上げると、高齢者は顔をほころばせ、周囲の声援に手を振って応えた。

